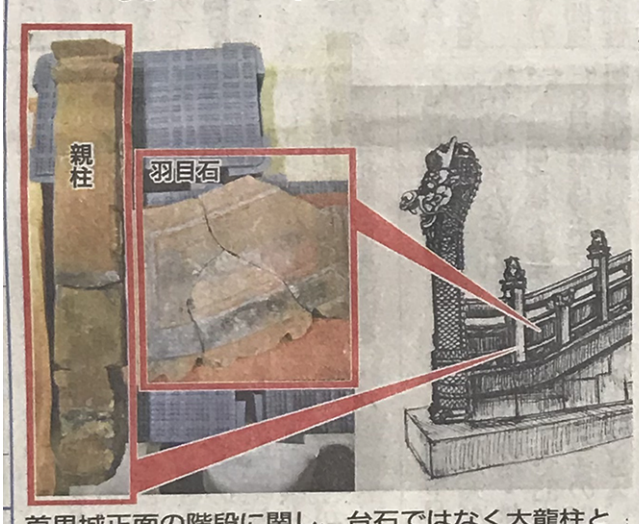
欄干と大龍柱 接続か

首里城正殿の遺物分析

85～87年出土の羽目石と親柱



首里城正面の階段に関し、台石ではなく大龍柱と欄干がつながっていたと推測する西村貞雄氏が描いたイメージ図。県立埋蔵文化財センターが所蔵する湾曲した羽目石と親柱は大龍柱と欄干がつながった下部の羽目石の現物と西村氏は指摘する

1985年から87年にかけて行われた首里城正殿跡の発掘調査で、正殿の正面階段の欄干（手すり）が直接、大龍柱につながっていた可能性を示す遺物が見つかっていたことが22日までに分かった。昨年10月末に焼失した正殿の大龍柱は台石の上に乗っており、欄干とは直接つながっていない。専門家は「本来の大龍柱は台石に乗っておらず、欄干と直接つながっていた可能性を示す。江戸時代にあった正殿の、遺物の可能性もある」と推測した。

（11、19面に関連）

昨年10月31日に焼失した首里城正殿の再建に向け準備が進む中、大龍柱の向きなど在り方の再考を求める声も上がっており、注目を集めそうだ。

見つかっていたのは、欄干に取り付ける板の部分に当たる「羽目石」と、羽目石に接続する「親柱」。羽目石は湾曲し、ほかの羽目石に比べて長さが少し短いのが特徴だ。首里城正殿跡の発掘調査で出土し、西原町の県立埋蔵文化財センターが所蔵している。

同センターによると、羽目石や親柱の年代などを特定することは難しいという。

彫刻が専門で1992年の首里城再建にも関わった西村貞雄琉球大学名誉教授が今年3月、同センターが所蔵する出土品を複数回にわたって調査した際、湾曲した羽目石に注目した。

（宮城久緒）

第3種郵便物認可

親柱に「ほぞ穴」痕跡

年代・場所、特定はできず

首里城欄干遺物

1985年から87年にかけて行われた、首里城正殿跡の発掘調査で見つかった正殿正面階段の欄干（手すり）の羽目石は、上部が欠けているがほぼ完全な形で残っている。羽目石の上辺と下辺を見ると湾曲しているのが分かる。同時に見つかっている親柱の前後には羽目石を接続したとみられる「ほぞ穴」の痕跡が残っている。調査をした琉球大学の西村貞雄名誉教授によると、羽目石と親柱を違和感なく並べることができたという。

（1面に関連）

西原町の県立埋蔵文化財センターによると、羽目石や親柱が見つかった地層や発見された地点は明確に分かっていない。

現在、大龍柱の台石につながっている欄干の羽目石はひし形をしており、上辺と下辺は直線で湾曲していない。他に見つかっている遺物の羽目石もひし形をしている。西村氏によると、湾曲した羽目石は、その形状から階段の下から2番目の羽目石に当たるという。大龍柱に直接つながっていたと推測する根拠として、西村氏は湾曲の角度などを挙げている。ただ、他の羽目石に比べ、長さが少し短いという。

西村氏によると、1768（明和5）年に作成された「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記（寸法記）」以降に作られた正面階段の欄干は、大龍柱の下の構造になっている。西村氏は「1760年（江戸時代、宝暦10年）前後は地震が複数あった。大龍柱と欄干とのつながりに影響があったことから、8年後に作成された寸法記では応急措置として、台石を取り付けた形状で書いたのではないか。湾曲した羽目石は1760年前後の地震で損壊した、欄干の一部である可能性がある」と推測した。

さらに「欄干が直接、大龍柱につながっていたとすれば、首里城に他にもある龍の彫刻の気の流れなどから考え、向かい合わせではなく、正面を向いていたと考えられる」との考えを示した。

（宮城久緒）

県立埋蔵文化財センターが所蔵する欄干の親柱と羽目石＝2020年3月10日、西原町上原（西村貞雄氏提供）

文化

主体性回復
■首里城再建を考える■ への道 ■1■

西村 貞雄

首里城が焼失してから10月31日で1年がたつ。玉城デニー知事は「首里城復興基本方針」の中で、「琉球の歴史・文化」の復興を掲げた。基本方針では「県民との連携」も表明されており、県民が主体となった首里城の再建を望む声は根強い。県民にとってあるべき首里城の姿や沖縄の文化を、県民が主体的に考えることについて首里城や琉球・沖縄の文化や歴史に詳しい識者らに寄稿してもらう。

「平成の復元」で建てられた大龍柱。2体が向かい合わせに建ち、大きな台石に乗っている（西村貞雄氏提供）

2019（令和元）年10月31日未明に発生した首里城火災は、目を疑うような光景のなかで、正殿前の大龍柱だけが奇跡的に焼け残った。大龍柱を復元した過程を振り返ってみると、大龍柱は過去に散々な目に遭っている。1760年代には大地震があり、明治半ば頃には全容の高さが約3㍍あった大龍柱が、胴体中央部の約1㍍強を損失し、昭和8年頃には正面向きだった大龍柱が向き合う形（沖縄神社拝殿に伴ってこま犬同様）になった。さらに沖縄戦によって吽形頭部のみ残って全壊した。

復元

平成の復元時には、全容の大龍柱がどのような姿だったのかの記録はなく、1768年に作成された『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（略して寸法記、沖縄県立芸術大学蔵）に全容の姿らしき絵があった。これは大龍柱・小龍柱などの絵図に寸法などが記入されている資料で、大龍柱の高さを確認することができた。その他として大正・昭和初期頃の鎌倉芳太郎などの撮影の大龍柱写真や1933年頃の「沖縄神社拝殿」になった修理後（拝殿図）の大龍柱のスケッチ、沖縄戦で残った遺物などがあり、これらを基にして復元をした。

復元に当たっては、「寸法記」の絵図や写真などは貴重な手掛かりにはなったが、大龍柱を前後左右から捉えた形はなく、高さや残った遺物、写真を基にして縮尺5分の1の大きさで粘土の立体像を試みる。高さを決めて頭部、下部などの比率を出していくが、欠落した胴体中央部は撮影されてはおらず、小龍柱に関連づけて手探りしていく復元製作であった。

大龍柱（縮尺5分の1）の2体の立体像を基にして、沖縄戦で破壊された、その残片遺物を組み合わせて実物大で完全復元した。

にしむら・さだお　1942年南城市（旧佐敷村）生まれ。琉球大学教育学部教授を経て、現在同大学名誉教授。第61回二科展特選賞（76年）など受賞多数。首里城正殿の龍柱など彫刻を中心に復元事業に携わったほか、県内各地のモニュメント、著名人の肖像など数多く手掛ける。

大龍柱 ㊤

「寸法記」根拠に向き合う
本来の姿ではない大龍柱

形態

首里城正殿には龍柱が3カ所にある。正殿屋内の2階・御差床の木製の龍柱と屋外の石彫の小龍柱と大龍柱である。

首里城正殿の龍柱とは、一般的にある龍が柱に巻いたものではない。正殿の龍柱は、胴体が太い四角柱で垂直に伸び、上部に鎌首を持ち上げた頭部が、下部に至ってはトゲロを巻いた尾がある。1768年の「寸法記」を一級資料とし、その中の絵図が向き合っていることを根拠として単純に決めつけたことが尾を引いている。

台石

大龍柱には高さと同時に独自の形態があるが、その形態や本来のあるべき姿が途絶えたのは、台石によって大龍柱が単独に立つ形になってしまったことにある。

台石に乗った大龍柱になったのは、1760年の大地震によって首里城の城壁57カ所の損壊があり、大龍柱にも欄干から外れる被害があって応急措置の形で台石に設置されたと推測する。このことが「寸法記」絵図に表され、その後に影響をもたらした。

台石に建つ大龍柱が時間の経過に伴って本来の位置づけとは違った解釈がされて、正殿の末広がりの階段とは掛け離れた存在になったと推測する。

明治以降・大正・昭和の首里城正殿、大龍柱、台石などの写真（当時）を分析することによって明らかになったことは以前、大龍柱は御庭に対して正面向きであったが、昭和の解体修理後（1933年頃）の沖縄神社拝殿の位置づけに伴って大龍柱（阿形・吽形）が向き合う形になっている。

台石は、1768年の「寸法記」以来、大龍柱に設置されており、写真から見ると台石の素材や形状、台石に隣接する欄干の親柱に「ほぞ穴」があることからみて応急措置で台石を取り付けたことが判明される。その根拠には、約3㍍もある高い大龍柱に大きな台を取り付ける必要があるか、また、何も施されていない琉球石灰岩製で形状からみて、単なる台石としか見られない。

台石は土台として据え置くもので、上に来る物体に耐えうる台である。台座であれば、彫刻作品などをのせておく調和のとれた台と言える。この視点から見るとこの場合は台石と見える。

大龍柱の台座とした場合には、首里城正殿の建物には「禅宗系の文様」が取り入れられている。例えば、向拝柱の礎盤には禅宗系の文様があるように、大龍柱を独立して建てると仮定すると、当然禅宗系の模様が施されて設置されると考えるが、現状の台石には禅宗系の文様もないし、それに隣接する欄干の親柱の「ほぞ穴」は不自然である。

（琉球大学名誉教授）

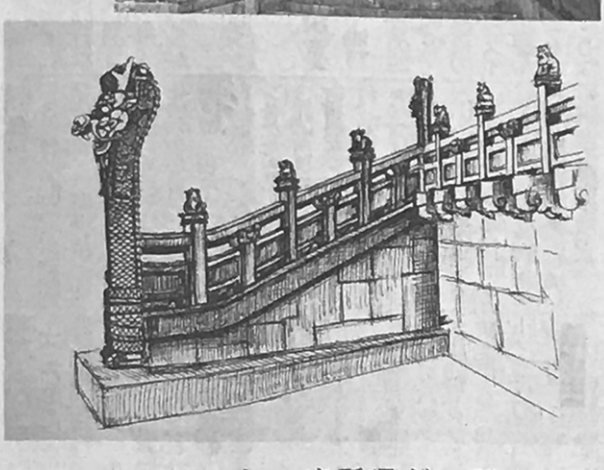
文化

主体性回復
■首里城再建を考える■ への道 ■2■

西村 貞雄

2019年10月31日に焼失した首里城正殿の前の2体の大龍柱はそれぞれ台石にのり、向き合う形になっていた。しかし、本来あるべき形ではない。大龍柱の本来あるべき姿が途絶えたのは台石にのり、大龍柱が単独に立つ形になったことが要因であることは前回触れた。

2019年10月31日に焼失した首里城正殿前の大龍柱（吽形）。阿形と吽形の2体の大龍柱は向かい合わせに立っていた＝2013年9月、那覇市



欄干親柱と羽目石

首里城正殿の大龍柱は、小龍柱と同じ形態を持っていることから欄干に組み込まれた仕組みとみられる。その根拠になるものとして①明治・大正・昭和（戦前）の写真②大龍柱と台石との関係と台石に隣接する欄干の親柱にある「ほぞ穴」の写真からの判断③その写真の実物と判断できる遺物（沖縄県埋蔵文化財センター収蔵）―が挙げられる。これらの理由から本来、台石はなく大龍柱と欄干はつながっていたと推測できる。

大龍柱 ㊥

世界に類例ない大龍柱
正面向きで気の流れ形成

①末広がりの階段に大龍柱と小龍柱として位置付けられている。なぜ、大龍柱に台石を設置する必要があるのか？

②龍柱という同じ形態である小龍柱・大龍柱は小と大の差はあるが、部位として位置付けられているとみれば、欄干に組み込まれることが必然である。小龍柱は欄干に組み込まれており、大龍柱に台石を取り付けて独立した形は不自然である。

③末広がりの階段の構造からして御庭に対して広がりを与える構図だと推察できるが、階段の先端に大きな台石を設置するのは、意図することを狭めていると判断する。（龍の流れと構えからの配置にも疑問がある）

④全容が高い大龍柱に大きな台石を取り付ける必要があるか。美意識の観点からも疑問が生じる。

⑤正殿の建物に付随する構造物には禅宗系の文様が施されている。例えば、向拝柱には礎盤のように禅宗系の文様があるが、台石はただの直方体である。

⑥首里城跡（世界文化遺産）の基壇を見せるために、正殿の建物を70㌢底上げしている場合、台石は正殿全体の形・美意識にも影響を与えている。

以上、6つの観点から判断して、1760年に城壁57カ所が損壊した大地震によって、高い大龍柱と欄干とのつながりに影響があり8年後の1768年に作成された寸法記の大龍柱に土台が取り付けられたのは応急措置だったと推察する。

本来の位置付け

大龍柱を欄干に取り付けることによって向きの問題は自然に解決される。その根拠は、小龍柱同様、龍柱の背面で欄干とつながれることによって、龍柱は単独では解決できない。まず、大龍柱がどのような形態のものであるかを知ることである。正殿の建物には、多くの龍が配置されているがその中に龍柱という独自のものがある。正殿の屋内2階に御差床の龍柱、屋外の正面階段に小龍柱・大龍柱があるが、3体とも同じ形態の龍柱であっても、大龍柱がどのような位置付けにあるかということを知ることが重要だ。

大龍柱の存在は正殿全体に関わるものであり、王府による龍の配置と位置付けとしての統一感にも影響する。大龍柱を向かい合わせることは正殿の内部から流れ出る龍の気を御庭に向けて作り出すことにはならない。大龍柱を正面向きにすることによって、正殿の33体の龍の気の流れが大龍柱に結集し、つながりが保たれる。

大龍柱は諸外国にはない高さと、独自の形態があることから大龍柱の独自性を知ることによって首里城正殿が唯一無二のものであることが理解される。

（琉球大学名誉教授）

（1面に関連）

（次回は10月初旬に掲載）

台石ではなく大龍柱と欄干がつながっていたと推測した西村貞雄氏のイメージ図。沖縄県立埋蔵文化財センターが所蔵する少しわん曲した羽目石と親柱について、西村氏は大龍柱と欄干がつながった下部の羽目石の現物と推測している